



「ハンセン病フィールドワーク」

2026 年 5 月

法人事務局 川畑 さとみ

神御自身、「わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにはしない。」
と言われました。
(ヘブライ人への手紙 13 章 5 節)

清教学園では、毎年 3 月に「ハンセン病療養所フィールドワーク」として国立療養所長島愛生園と邑久光明園に訪訪しています。このハンセン病フィールドワークの始まりは、以前チャプレンをされていた秋山英明先生が、神学校生の頃から国立療養所大島青松園に訪れ、入所者の方と一緒に海水浴をされるなど交流を重ねられてきたことから聞きました。先生は、入所者の方が病気だと知ると部屋を見舞われ、最後の看取りの時も賛美歌を共に歌われたそうです。しかし、国立療養所大島青松園では、飲料水の確保が困難で多くの外部者を受け入れ難い状況となっていたため、フィールドワークは、国立療養所長島愛生園と邑久光明園に変更されました。

さて、それぞれの療養所の敷地内には、キリスト教の教会があるのですが、国立療養所邑久光明園にある邑久光明園家族教会の壁には、河内長野教会を創立した A.D.ヘール宣教師の肖像写真や邑久光明園家族教会創立 100 周年記念礼拝に出席された清教学園創立者の中山昇先生と植野事務局長が写った記念写真が飾られています。私は、今年の 3 月にこの二枚の写真を観ることができました。写真からは、長い月日は流れても、この同じ療養所に訪れたという親近感をおぼえ深い繋がりを感じました。教会の日曜礼拝には、多い時には 200 人以上の入所者の方々が出席されていたそうです。しかし今では入所者の方々も高齢となり、外部の方がお一人で礼拝を捧げているというお話を聞きました。療養所も教会も岡山県に移転する前は、現在の大阪市西淀川区に「外島保養院」、「外島家族教会」としてありました。今に至る歴史をご紹介します。

外島保養院は、1909（明治 42）年に設立され、大阪府と兵庫県の境を流れる神崎川河口近く、周囲 2km 以内に民家はなく海拔 0m の湿地帯にありました。1934 年（昭和 9 年）9 月 21 日、室戸台風の襲来により、瞬間最大風速 60m を超えたといわれる暴風とともに、大阪湾には巨大な高潮が押し寄せました。大阪市の西部一帯から堺、岸和田にいたる広い範囲が浸水し、特に大阪市内の低地は、海岸から 4km 以上離れたところまで水につかりました。外島保養院全体が水没し、建物の半数以上が流失、残った建物もそのほとんどが全半壊や浸水の影響で大破し、壊滅的な状況になりました。この台風により、全入所者 597 人のおよそ 3 割にあたる 173 人が犠牲となり、うち 11 人の遺体は不明のまま、職員 3 人とその家族 11 人も犠牲となり、工事関係者 9 人を合わせると、合計 196 人が亡くなりました。西淀川区内の死者・行方不明者は 248 人とされているので、実に 8 割近くを外島保養院の犠牲者が占めていたこととなります。川と海に囲まれ、生活には全く適さない土地に建設された外島保養院であったことを象徴する数字といえます。無事だった入所者 424 人のうち、その後死亡した 1 人と退院した 7 人を除く 416 人の委託療養先は、現国



立療養所松丘保養園に50人、現国立療養所栗生楽泉園に98人、現国立療養所多摩全生園に70人、現国立療養所長島愛生園に78人、現国立療養所大島青松園に70人、現国立療養所菊池恵楓園に50人と決まり、それぞれの療養所に旅立ち、最後の一陣が委託先に向かったのは、1か月後の10月21日でした。そして、台風襲来から11か月後、外島保養院は大阪近辺で復興することなく、岡山県邑久郡裳掛村大字虫明長島に復興地が決定し「光明園」が建設されました。(『大阪にあったハンセン病療養所 外島保養院』外島保養院の歴史を残す会 発行より)

また、外島家族教会の初穂として、外島保養院で、1912(明治45)年10月11日にA.D.ヘール宣教師によって12名の洗礼式が執り行われたという記録が下記のように残っています。

困難の極みにあった明治、大正時代の療養所に福音を持ち運んだ伝道師、宣教師の働きは記憶されるべきです。外島家族教会の場合、福音の種を蒔くべく、わらじに羽織姿でせっせと病院を訪れたのは福田荒太郎先生とA.D.ヘール先生であるとされています。青年伝道師福田荒太郎、70歳を越した長身のアメリカ人であるカンバーランド長老派の宣教師A.D.ヘール、このお二人の協力を思っただけで胸の熱くなるのを覚えます。(津島久雄著『悩みの日にわたしを呼べ』新教出版社より)

そして、この洗礼式での様子を、中山昇先生の著書『A.D.ヘールに学ぶ』では、下記のように記されています。

外島保養院の家族教会では202人の入所者と職員に洗礼をさずけられたと言うことだが、この入所者たちが、式後「おめでとう」と握手されて、驚き、喜び、「はじめて本当に人間の心にふれた」と感謝している喜びの声に、この世をこえた尊さ、美しさが輝いている。

ハンセン病問題について、隔離を定めた法律の廃止や国の過ちが認められた違憲判決をもって「解決した」と言われることがありますが、現在も、回復者・家族の多くが、回復者・家族であることを家族など身近な人にも話せずにあります。私たちは、常に神様からいただいている恵みをおぼえ、A.D.ヘール先生や秋山英明先生が入所者の方々と、わけ隔てなく歩まれた歴史を未来に語り繋げなければなりません。そしてハンセン病フィールドワークを通して、現地を訪れ未だ終わっていない偏見や差別を再確認し、入所者の方々の尊厳の確立や社会参加を図る上で、今後もハンセン病に関する正しい知識を広く普及させ、誰もが共に生きられる社会をつくっていく必要があります。